

諭吉も認めめた先見性

三月二十六日から計十回連載した「時流の先へ」中部財界ものがたり」第六部は、日本の陶磁器を世界に広めた森村グループの創成期を描いた。グループ躍進の背景には、創業者の森村市左衛門と豊の兄弟らの才覚に加え、森村組（現森村商事）の番頭役を務め、ニューヨークでも活躍した村井保固の貢献があった。波乱に満ちた村井の生涯を二回に分けて紹介する。（石井宏樹）



入り組んだりアス式海岸に設けた「村井幼稚園」を望む小高い山々に、濃緑に、青銅製の村井の胸像がのミカンの木々がびっしり立つ。と並ぶ。「愛媛ミカン」発祥の地、愛媛県宇和島市吉田町。ここで村井は生まれ育った。一九二三（大正十

二）年に村井が実家の跡地「横断太平洋九十回」直筆が刻まれている。村井は当時の日本人の太平洋渡航の最多記録を持っている

第6部 陶磁器を世界へ 〈番外編〉

森村組の大番頭・村井保固 ①



村井保固の胸像を見つめる赤松嘉進さん＝愛媛県宇和島市で

り、さらに鉄道を乗り継いで北米大陸を横切る過酷な旅だった。村井の伝記には「太平洋上で七年、汽車の中で二年半を過ごした」とある。

た。日米四十五往復は、二ユーヨークの森村ブラザーズと日本の森村組の双方の総支配人を務めた激務を物語る。小さな船で太平洋を渡るのに一カ月ほどか

村井は幼稚園や中学校、

え、地元にも大きく貢献した」と話す。慶応義塾で学んだ村井が一八七九（明治十二）年に森村組に入ったのは、福沢諭吉に勧められたからだっ

た。当時の塾生は卒業後、政治家や官僚になるのが主流だった。しかし村井は塾の演説会で「西洋では社会の中心は商人だ。新しい教育を受けた青年が商業界で国家の発展に努力すべきだ」と訴える。官尊民卑の風潮を憂いていた福沢は「今の話は上出来だ」とほめる。

から塾生の紹介を頼まれていた福沢は、村井を推薦することにした。ニューヨークの森村ブラザーズに勤めてもらうため、森村組が求めたのは英語と簿記ができる社員。村井はどちらも苦手だった。

福沢に打ち明けると「ばか野郎。そんな支度ができていないとは言語道断だ」と怒られ、就職の話は消えかける。

福沢から卒業後の進路を問われた村井は夢を語る。「半官半民の大企業ではなく、丁稚生活から始められる小さな店に入りたい」。そこで旧知の森村市左衛門

村井は切り返す。「森村組は小手先の利く小物が欲しいのか。将来の大黒柱を求めているのではないのか」。威勢のいい物言いに、福沢は機嫌を直す。「それは面白い。もう一度話をしてやろう」。村井は晴れて森村組の門をくぐった。（文中敬称略）

村井保固（むらい・やすかた）1854（嘉永7）年、今の愛媛県宇和島市に生まれ、77年に慶応義塾に入塾。福沢諭吉の紹介で79年に森村組に入る。創業者の森村豊の下、ニューヨークの森村ブラザーズに勤め、99年に豊が他界した後は総支配人などとして店を切り盛りする。1909年に森村組本体の総支配人にも就任。35年に太平洋横断90回を達成し、翌36年に81歳で死去。